

K-2 東松島市宮戸月浜地区 2011年12月10日(土)

報告者名	俵木 悟	被調査者生年	1972年(男)
調査者名	俵木 悟	被調査者属性	海苔養殖業、民宿経営
補助調査者	大沼 知		

月浜の主要産業について

話者は、海苔養殖業と民宿経営を行っており、これは震災以前の月浜に最もよく見られた生業形態であった。また民宿経営をしている家では、多くが別の複合的な漁業にも従事していたという。以下は、話者の認識による月浜での典型的な漁業形態である。

春：アサリ取り（観光潮干狩り含む）、刺し網、定置網（壺網）

夏：磯漁（男性素潜り、主として鮑）

秋：定置網、海苔の種付け

冬：海苔養殖、刺し網

これらの漁業は、定置網も含めすべて小規模で、基本的に個人または家族（＝民宿）で営んでいた。網漁も、とくに特定の魚種を狙うということはなく、季節ごとに入る魚を捕っており、その大半は民宿で宿泊客に供される。漁獲を販売する場合も、少量なので漁協を通さず、直接市場に持っていく場合が多かったという。小遣い稼ぎ程度のもものと認識されていた。

民宿経営は夏が稼ぎ時で、海水浴客のほか、学校単位の海洋体験学習の受け入れで安定した客数を確保していた。その他の季節でも、地域の契約講等の団体旅行が、毎年特定の日に来ていたという。こうした事情から、家族経営であっても、一日に少なくとも40名ほどが宿泊でき、宴会を開くための大部屋をもつ民宿の規模が保たれていた。

海苔養殖の協業化について

海苔養殖の共業化については、震災以前から、月浜でも2軒の養殖家が里浜の5軒と共同で操業していた。この2軒以外に月浜には8軒の海苔養殖業があり、そのうち7軒で協業化の計画を進めている。すでに新しい工場2棟の建設予定地も決まっているという（現在、仮設住宅が設営されている区画から、さらに大浜寄りの場所が建設予定地）。

現在の（宮戸西部漁協の）組合長が海苔業者ではないので、共業化に関して、会議に出席したり、情報収集をするなど、積極的な動きをしてくれなかった。そのため、月浜の海苔養殖の共業化は出遅れたと感じているという。

話者自身は、数年前に、海苔乾燥機等を4,000万円ほどかけて新調したばかりだったが、今回の津波で流されてしまった。それでも人的被害が出なかったのだから幸せだったと思っているという。しかし、これから再度個人で設備を整えると、その数倍の金がかかるはずで、それだけの融資を個人が銀行から受けることはもう難しい。したがって、海苔養殖を再開するには、共業

化以外に道はないと考えられた。

震災後の民宿経営について

月浜の集落地（地元の人にはハマと呼ぶ）は、全戸が津波の被害を受けたことから、今後居住地としては利用できなくなり、集団移転が検討されている（この話を聞いた時点では、調査者はまだそのことを知らなかった。その詳細は、翌日の月浜区長との面談で知った）。しかし新しい居住地は、限られた宅地を希望者に均等に配分するため、震災以前の民宿の規模を保つことはほぼ不可能になる。話者は、規模を縮小し、10名程度を最大定員とする自宅兼民宿として再開することを考えているという。ただしこの規模で経営の採算がとれるのかは未知であり、話者の父は、自宅とは別に民宿の用地を確保して、従来の規模で再開したいという希望をもっているという。

来年のえんずのわり行事の実施について

月浜に伝承される小正月の鳥追い行事である「えんずのわり」は、平成18年に国の重要無形民俗文化財に指定された。近年は、月浜在住の小学生・中学生男子が参加して行ってきたが、今年中学3年生だった1名が抜け、次回の参加者は総勢3名となる。そのうち大将（参加者中最年長の者）となる小学5年生を含む2名が話者の息子である。

震災で深刻な被害を受けたにも関わらず、来年1月の行事を行うことはすでに決定しており、調査日には山に入って松の枝を切り、五十鈴神社の境内で、行事に使う神木（マツノキと呼ぶ）を作っていた。話者は、息子たちが参加するのでそれに付き従っていた。また、今年の大將役であった高校1年生が手伝いで参加していた。

今度のえんずのわりをやると言い出したのは子どもたち自身であるという。現在、行事の舞台となる神社や、その傍らにある岩屋の整備を行っている。ただし近年は、行事の期間中、子どもたちは岩屋で食事をとり、神社の境内に寝泊まりしていたが、今度はそれは無理である。またえんずのわりの行事の中心である、子どもたちによる集落の家回りも、家屋のほぼ全てが津波で流されたので不可能である。どのように行事を実施するかは保存会が決めることで、話者は知らないという。月浜の仮設住宅の中でお籠もりをするのだろうが、家回りは仮設住宅内を回ればよいというほど単純ではない。月浜の仮設には近隣の別集落の人々も入居しているし、月浜の住民でも別の場所に住んでいる者もある。話者の家族も宮戸小学校の仮設住宅に入居している。さらに、集落の家回りは回る順番も定まっていたが、仮設で回る順番をどうするかの問題もある。

なお、話者は月浜の仮設に親戚がいるので、当日（14日の晩）はそこに行って拝んでもらうつもりだという。

宮戸小学校の統合問題

話者は現在、宮戸小学校のPTA会長をしている。震災後も、学校に通う2人の子どものことを考え、月浜の仮設住宅ではなく宮戸小の仮設に入居することを決めた（宮戸小仮設に入居しているのは、月浜からは話者の家族のみ）。今年度、宮戸小は全校で29名。震災後、学校統合の話が出ているという。統合は野蒜小学校とになるだろうが、野蒜小は震災で大きな被害を受けているのでどうなるか心配している。また、学校が統合されると、小学生が下校後にお籠もりを行っ

ているえんずのわりの実施にも影響が出ることが懸念されている。